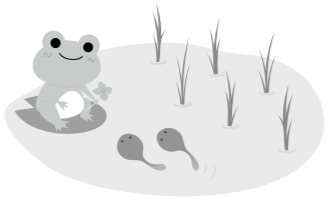


水稲



★田干し・溝切り

- ・「湧き」が見られる水田では田干しを行う。
- ・田干しにより土が適当な固さになったら、圃場内の通水を容易にするため、溝切りを実施する。
- ・溝切りは、縦に3～5m間隔で行い、最後に排水溝や溝の縦横をつないでおく。

★中干し

- ・中干しは目標茎数（350～380本/m²程度、坪60株植えの場合1株20本程度）が確保されたら行う。
- ・中干しはあくまでも「中程度に干す」であり、砂質浅耕田や乾田は、干しすぎないように注意する。

圃場別中干しの程度

圃場条件	程 度
地力のない砂質浅耕田	足跡に水が残る程度
乾田	弱め(田干し程度)
地力のある湿田	強め(ひび割れの幅は生育が旺盛な圃場1cm程度以下)

※ 水不足が予想されるときには、やや軽めに行う。

★けい酸加里またはファイトアップの施用

- ・けい酸は、葉緑素の光合成能力を高めて異常気象や高温、強風に耐える稲体に育てる。倒伏や秋落ちを防止すると同時に、強風による着色粒

を軽減する効果があるため、6月中旬～下旬に「けい酸加里」を30kg/10a施用する。

- ・水稲用投げ込み発泡剤であるファイトアップは、天然酵母エキス、メチオニン、キトサンオリゴ糖等を主成分としており、6月中旬に施用すると根群が増加し、根の活力が高まる（写真）。

- ・ファイトアップの施用により、
 - ①登熟の向上、
 - ②食味の向上、
 - ③倒伏軽減などの効果が期待できるため、労力的に「けい酸加里」の施用が困難な場合には、6月中旬～下旬に本資材を10錠/10a施用する。

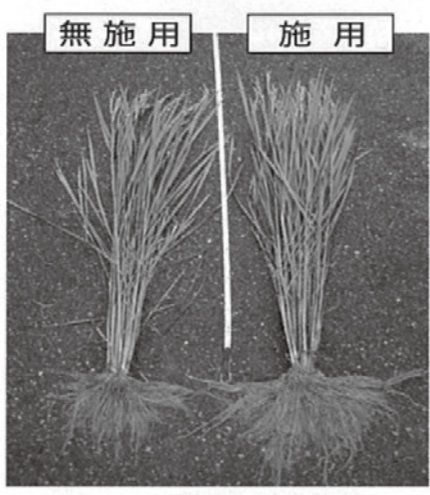


写真.ファイトアップ施用による根群増加効果(6月中旬処理)

表.夏野菜類の追肥時期と施用量

種類	施肥時期		施用量		備考
	1回目	2回目以降	1回目	2回目以降	
キュウリ	●最初の果実を収穫した直後	●1回目の追肥から7～10日おき	20g/株	10g/株	
トマト	●1段目の果実が500円玉大になった頃	●1回目の追肥から7日おき	10g/株	10g/株	○枝先端部直下から内側15cm幅のドーナツ状に施用する
ナス	●最初の果実を収穫した直後	●1回目の追肥から15日おき	20g/株	10～15g/株	○1回当りの過施用は絶対に避ける
ピーマン	●最初の果実を収穫した直後	●1回目の追肥から15日おき	20g/株	10～15g/株	
スイカ	●1番果がコブシ大になった頃	●1回目の追肥から15～20日後	2kg/a	1～2kg/a	○株元には肥料を吸収する根がないので、つるの先端部付近に施用する
カボチャ	●1番果がソフトボール大になった頃	●1回目の追肥から15～20日後	2kg/a	2kg/a	
ジャガイモ	●開花が始まった頃に施用し、土寄せする	●1回目の追肥から20日目に施用し、土寄せする	15～20g/m	15～20g/m	○施用時期が遅れるとイモの肥大が悪くなる
サツマイモ	●基本的には施用しない。蔓の伸びが悪い場合のみ梅雨開け直後に畝の端に施用する		10g/m		○生育不良時のみ施用する

★一発除草剤で取りこぼした雑草の対策

- ・残っている草の種類に応じて、適切な除草剤を使用する。
- 【ヒエのみの場合】…クリンチャー（1キロ粒剤・EW・ジャンボ）、ヒエクリーン1キロ粒剤
- 【コナギ、ホタルイ、オモダカ、クログワイ等広葉雑草のみ(ヒエはない)の場合】…バサグラン（粒剤・液剤）
- 【ヒエと広葉雑草両方の場合】…ワイドパワー粒剤、クリンチャーバスME液剤
- 【クサネム、イボクサ】…ノミニー液剤

★あきだわらの中間追肥

- ・地力の低い、水持ちの悪い水田や生育が悪い水田は、つなぎ肥として7月中下旬に「新エコ追肥」を10kg/10a施用する。

★紋枯病の予防

- ・本病害は予防が効果的であるため、昨年、紋枯病が発生し紋枯病の箱施薬剤を散布しなかった水田には、必ず7月にモンカット粒剤またはリンバー粒剤を散布する。

★斑点米の予防

- ・カメムシの食害による斑点米の発生防止のため、畦畔等の草刈りを行いカメムシの繁殖を抑えましょう。
- ・畦畔の草刈りは7月初めまでに行いましょう。

露地野菜

★追肥の施用は適期・適量がポイント

追肥は、一刻も早く野菜類に吸収させる必要があります。このため、施肥後3～5日で肥効が現れる速効性の「そさい5号」を施用して下さい。施用時期および施肥基準量は表の通りです。1株ごとに草勢を観察し、**草勢が強すぎる株はやや少なめに、弱い場合はやや多めに施用して下さい。**なお、追肥は雨上がり直後に施用するか、晴天が続く場合は施用直後に灌水して、肥料の溶解を促進させて下さい。

★病害虫防除

【うどん粉病】

高温乾燥期に多発する病気で、トマト、キュウリ、ナス、ピーマン、カボチャ等大半の夏野菜に発病します。4～5月が低温・寡日照で、6月以降急激に気温が高くて晴天が続くと激発します。防除のポイントは畑やハウス内を常時観察し、発生初期に薬剤散布をすることです。



【アブラムシ類】



春先から高温期にかけて多発する害虫です。大半の夏野菜の新葉に寄生、吸汁し、寄生した葉は内側に湾曲し、次々に新葉に移動、産卵します。多発すると葉はモザイク状になり、枯死します。防除のポイントは畑をよく観察し、新葉が内側に湾曲しておれば、直ちに薬剤散布して下さい。

【ハダニ類】

7月以降9月にかけての高温期に多発しますが、梅雨明けが早かったり、空梅雨等で降雨が少ないと、6月中～下旬に



大発生することがあります。アブラムシ同様、大半の夏野菜に寄生し、最初は下葉を吸汁し、産卵を繰り返して新葉に移動します。多発すると、葉表がカスリ状に白く退色し、葉の光合成能力が劣り、果菜類では果実品質が極端に低下してしまいます。防除のポイントは、多発してしまってからでは完全防除が困難なため、葉の一部がカスリ状に白く退色する初発時に薬剤防除をすることです。

温州ミカン

★病害虫防除

【そうか病・黒点病】

そうか病・黒点病対策として、今月上旬にエムダイファー水和剤600倍を散布して下さい。なお、アブラムシ類の発生がみられる園はダントツ水溶剤3,000倍を加用散布して下さい。なお、梅雨期間中降雨が多いと、そうか病、黒点病の発生を助長するので、降雨が多い場合は晴れ間をみてジマンドイセン水和剤500倍液を散布して下さい。

【カイガラムシ類】

近年、ロウムシ類初め各種カイガラムシ類の発生が増加傾向にあります。カイガラムシ類の防除は、成虫から幼虫が孵化する時しか効果が期待できません。ヤノネカイガラやコナカイガラは6月中旬にアブロード水和剤1,000倍液またはスプラサイド乳剤1,000倍液を散布して下さい。なお、ロウムシ類は7月上旬にスプラサイド乳剤1,000倍液を散布して下さい。